

ロスコ絵画におけるイメージの源泉

《キーワード》 抽象表現主義 シュルレアリスム 神話 ルミニズム

芦田彩葵

はじめに

抽象表現主義の絵画は、そのイメージの源泉において、風景的要素があることが度々指摘されてきた¹⁾。その理由として、ロスコを始め彼らの作品に、神の存在を感じさせる崇高性が内在し、それは、直接神の姿を画面に描くのではなく、自然という風景の中に神との交信を見い出そうとしたフリードリヒら北方ロマン主義や、アメリカのハドソン・リヴァー派に通じることを挙げている。しかし、ここで取り上げられるロスコの作品は、一九五〇年代以降の典型的なロスコ様式²⁾の作品(図1)から一九六七年に完成した《ロスコ・チャペル壁画》³⁾の作品までであり、晩年の《ダーク・ペインティング》⁴⁾は含まれていない。それらの作品にロスコが目指してきた崇高性や瞑想といったある種の宗教的体験を表現しようとした試みに関しては筆者は認めるものの、むしろ、筆者は《ダーク・ペインティング》(図2)にこの風景画的要素がより強く表れていると考えている。また、ここで現れてくる風景的要素は、これまでロスコの作品に見られてきた、ローゼンブラムらが指摘した畏敬の念を思

わせる崇高性というよりはむしろ、ルミニズムに代表される静謐さの中に見出す崇高性といえ、その質において異なっているといえる。さらに、《ダーク・ペインティング》は、色彩並びに構図の面から、ロスコの芸術観を決定付け、抽象画へと展開する契機となったシュルレアリスム時代の作品へと回帰している。本論では、ロスコ絵画のイメージの源泉となった風景並びに、ロスコの作品が、どのようにアメリカ風景画の系譜に繋がっていくかを検証していきたい。

一．ロスコのシュルレアリスム受容

抽象表現主義の萌芽が芽生えたのは一九三〇年代後半であるが、当時の彼らに、主題、様式の両面において大きな影響を与えたのは、ヨーロッパから流入してきたプリミティヴ・アートへの関心とシュルレアリスムの思想であった。一九三六年にニューヨーク近代美術館で「キュビズムと抽象美術」、「幻想美術 ダダとシュルレアリスム」が開催され、その後第二次大戦が始まるとヨーロッパからエルンスト、マッタ等がニューヨークに亡命してきたことで、これらの

思想はアメリカの若い芸術家達に一気に広がった。ロスコは、ゴッ
トリープと共に、他の芸術家達よりもいち早く、神話、夢、無意識
といった思想に関心を示し、創作した。⁽⁵⁾

ロスコとゴットトリープは、生涯を通して親友であり、お互いの芸
術の良き理解者であった。なかでも、二人がシュルレアリスム風の
作品を描いていた一九四〇年代、彼らは有名な共同声明⁽⁶⁾を発表し、
共同作品も制作⁽⁷⁾する等、芸術的思想において結び付きが強かった。
ジョン・グラハムと深い親交があったゴットトリープは、抽象表現主
義の作家のなかでも、早くからプリミティヴ・アートやシュルレア
リスムの思想に親しみ、特にユングの集团的無意識の思想に魅了さ
れていた。⁽⁸⁾ ユングの『変容の象徴』⁽⁹⁾は一九一六年に、『人間のタイ
プ』⁽¹⁰⁾は一九三九年に英訳が出版されていたので、ユングの思想に
触れるのは簡単なことであった。また一九三七年にグラハムが発表
した2つの論文⁽¹¹⁾は、ユング派についての論及だったので、ユング
の思想は当時の芸術家仲間の間で浸透していた。ロスコもゴットリ
ープからの影響でフロイトの予定説よりもユングの思想に傾倒して
いた。⁽¹²⁾ また、いささか誇張ではあると思うが、ロスコ自身は神話
の研究をするため、一九四〇年の一年間、絵を描くのを止めたと言
している。⁽¹³⁾

彼らがユングの思想に共鳴した背景には、アメリカの歴史があつ
た。ヨーロッパの芸術家たちが、オートマティスムの技法を用いた
のは、意識下から無意識の自分を解き放ち、無意識の精神が自由に
語ることで新しい表現を獲得したいという願いからであつ
た。彼らにとつては、ヨーロッパの長い歴史と伝統が、逆に新しい

表現方法を創出する足かせとなっていたのである。アメリカの画家
達は、このヨーロッパのシュルレアリスム思想における無意識の探
求に興味を持ち、オートマティスムも用いたが、新大陸に住む彼ら
にはヨーロッパが抱える長い歴史も伝統もなかった。従つて、抽象
表現主義の画家達が、既に確立された絵画の様式の歴史や伝統に左
右されず、時代や地域によつて変わることはない普遍的なものを希
求したのは、当然のことであつた。彼らの多くがヨーロッパ各地か
ら移住してきた移民であり、様々な文化や風習をもち、共通の歴史
も伝統もないアメリカ独自の絵画を表現し確立していくには、思想
や文化ではなく、唯一共有できるアメリカの広大な自然の風景や、
人間に本来備わる普遍的な心性や観念に頼る他なかったのである。
そして、彼らは無意識の中に、その普遍的な感情が存在すると考え
たのである。この点が、西欧文化のみを対象とし、無意識は各人の
抑制されたものであると指摘したフロイトを信奉するヨーロッパの
シュルレアリスト達との大きな違いであつた。抽象表現主義の画家
たちは、人間には普遍的な心性があると信じ、多くの神話や民族を
調査することで集团的無意識の存在を掲げたユングに傾倒した。

ユダヤ人として生まれ、少年期に迫害を受けたロシアからアメリ
カに移った後、世界大恐慌、第二次世界大戦を体験し、さらにナチ
スによるユダヤ人大虐殺の事実衝撃を受けたロスコは、人間は常
に不安や恐怖に苛まされ、非理性的な内面の本能や衝動に支配され
た野蛮な状態にあり、近代も原始の世界もさほど変わらない状態に
あるのではないかという考えに至つた。そして、その自らコントロ
ールできない非理性的な衝動の根底にあるのは、無意識だという結

